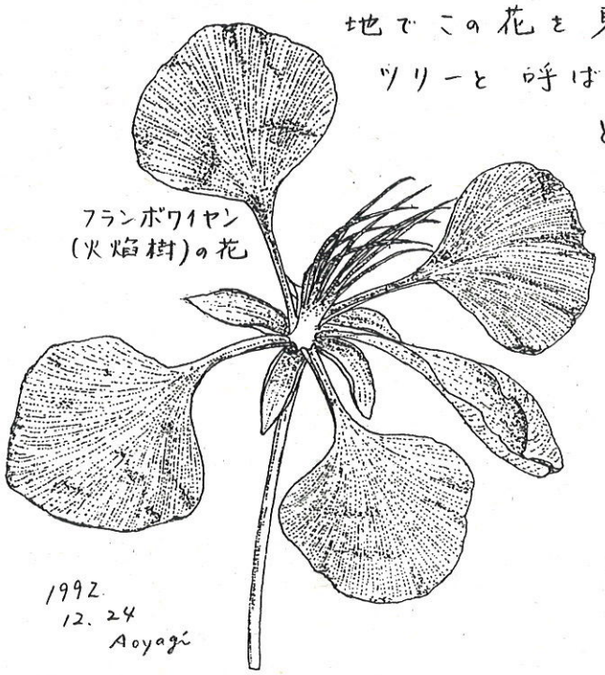
すっかんぽ

☆ 研究室だより No.9　　1993年 1月号

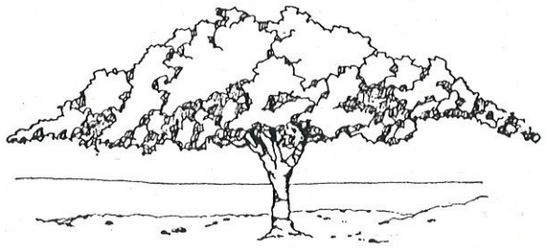
南の島のサンタクロース

1992年、12月24日、クリスマス・イブの日、私は、日本から、7000km離れた、ニューカレドニアに滞在していた。南の島といっても熱帯のジャングルではなく、年平均気温24℃前後と、亜熱帯の島である。しかし南半球なので、12月は、まさに夏のまっただ中。街中、いたるところで、フランボワイヤン（火焔樹（かえんじゅ）、日本名、ホウオウボク）が、まっ赤な花を咲かせていた。花びらだけでなく、おしべも、火を吹いているようにまっ赤なのである。去年フィジーにいってきた真鍋先生も、現地でこの花を見たそうだが、そこでは、クリスマスツリーと呼ばれていたらしい。

ところで、ずっと以前、南の島では、サンタクロースは、カヌーに乗ってやってくる、という話を聞いたことがあった。



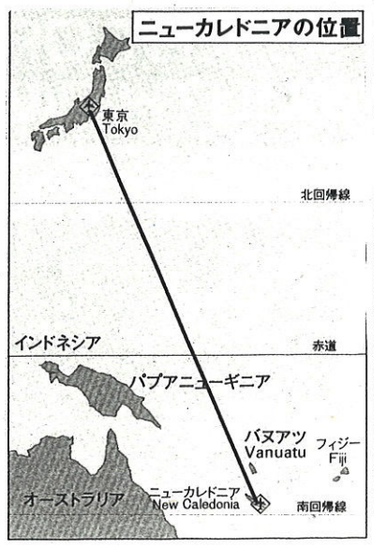
フランボワイヤン（火焔樹）の花

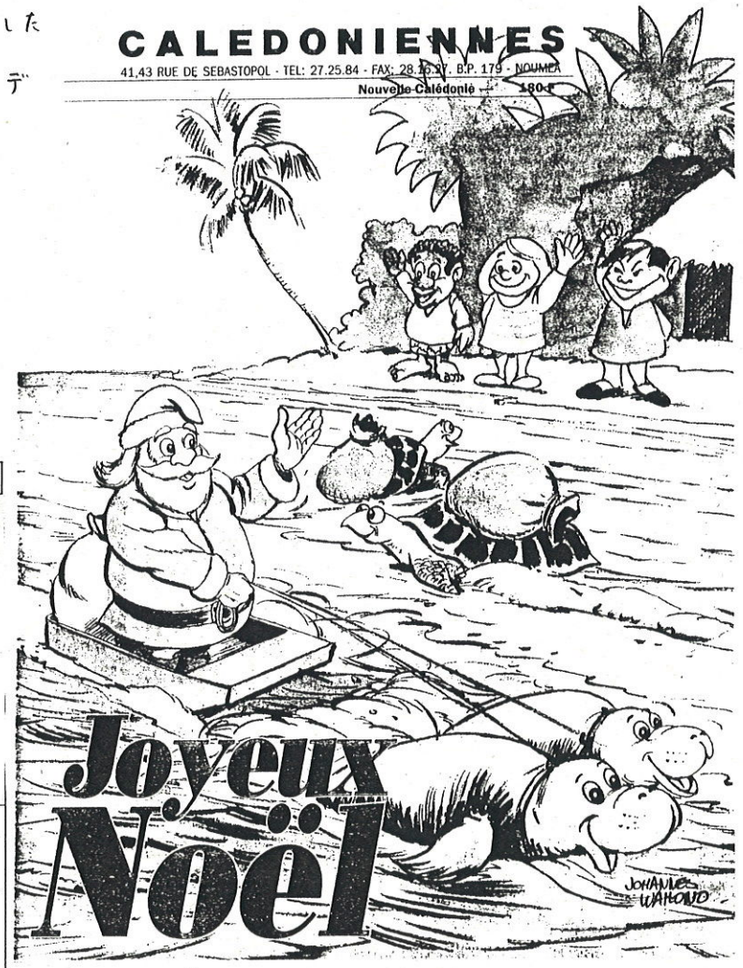


高さは10〜15mにもなる。

確かに、南の島で、トナカイにソリを引かせるのは、不可能だ。だから、カヌーでやってくるというのは、こちらでは、ごく自然な発想なのだろう。下の絵は、12月25日付のニューカレドニアの新聞の第一面（この4倍の大きさで、カラー印刷）である。サンタの服装は、おなじみのものだが、ソリ（カヌー）を引っぱっているのは、ジュゴン、プレゼントを運んでいるのは、ウミガメである。ジュゴンは、昔、人魚伝説のモデルとなった動物で、このあたりの海にも、生息しているらしい。

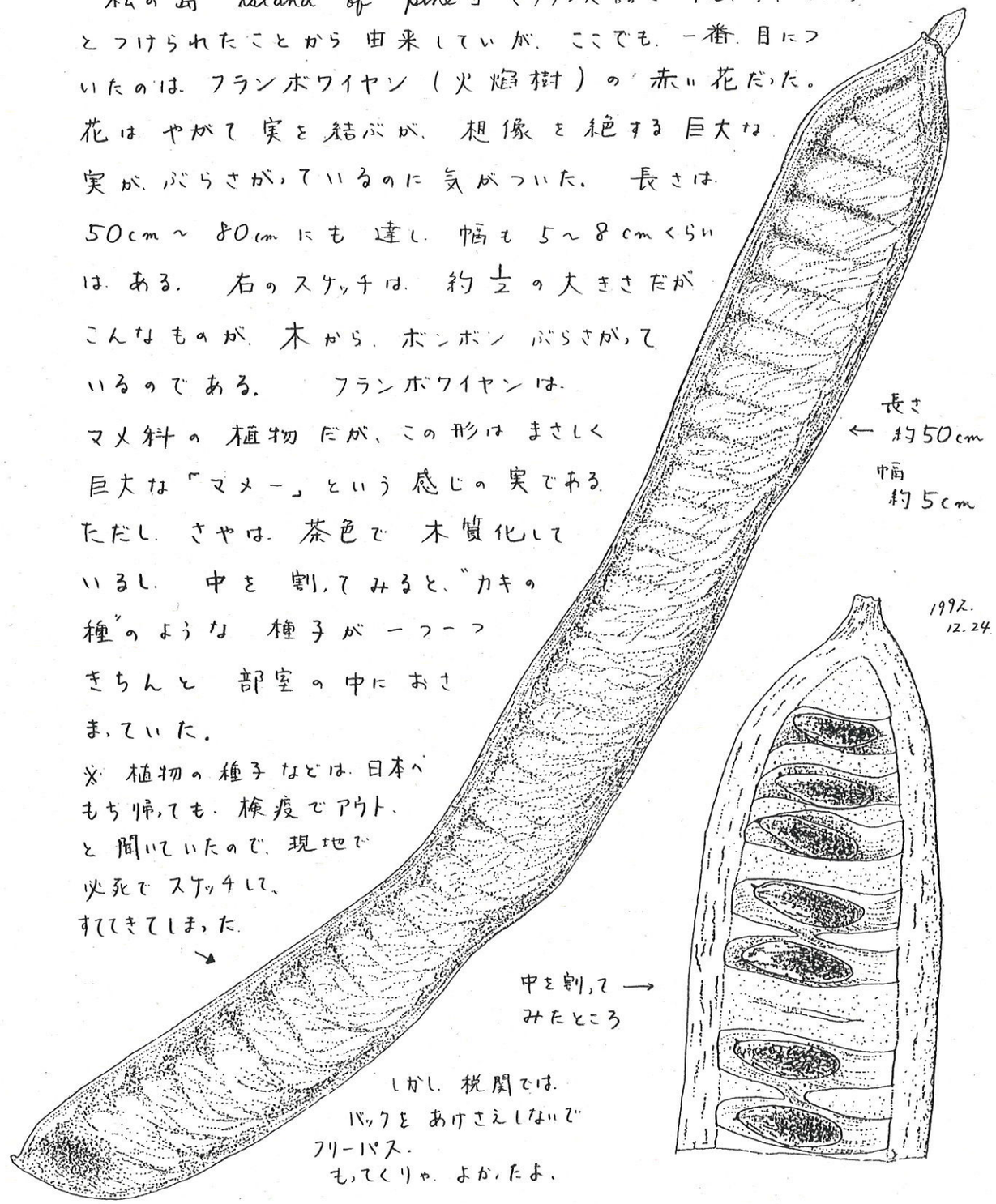
フランボワイヤン（火焔樹、クリスマスツリー）と、サンタクロース、このふたつが、1つに結びついたのが、私にとってのニューカレドニアだった。ニューカレドニアは、日本の四国ぐらいの本島と、たくさんの離島からなっている。24日は、そうした離島の一つであるイルデパン（松の島の意味）へと向かった。ただし、交通手段は、10人乗りの小型飛行機しかない。





イル・デ・パン島は、「天国にいちばん近い島」という映画で、有名になった。　島に群生している南洋杉を　松とカンちがいして、「松の島 island of pine」（フランス語で イル・デ・パン）とつけられたことから由来しているが、ここでも、一番目についたのは、フランボワイヤン（火焔樹）の赤い花だった。花はやがて実を結ぶが、想像を絶する巨大な実が、ぶらさがっているのに気がついた。長さは50cm～80cmにも達し、幅も5～8cmくらいはある。右のスケッチは、約$\frac{1}{2}$の大きさだが、こんなものが、木から、ボンボンぶらさがっているのである。　フランボワイヤンは、マメ科の植物だが、この形はまさしく巨大な「マメ」という感じの実である。ただし、さやは、茶色で木質化しているし、中を割ってみると、"カキの種"のような種子が一つ一つきちんと部屋の中におさまっていた。

※ 植物の種子などは、日本へもち帰っても、検疫でアウト、と聞いていたので、現地で必死でスケッチして、すてきてしまった。

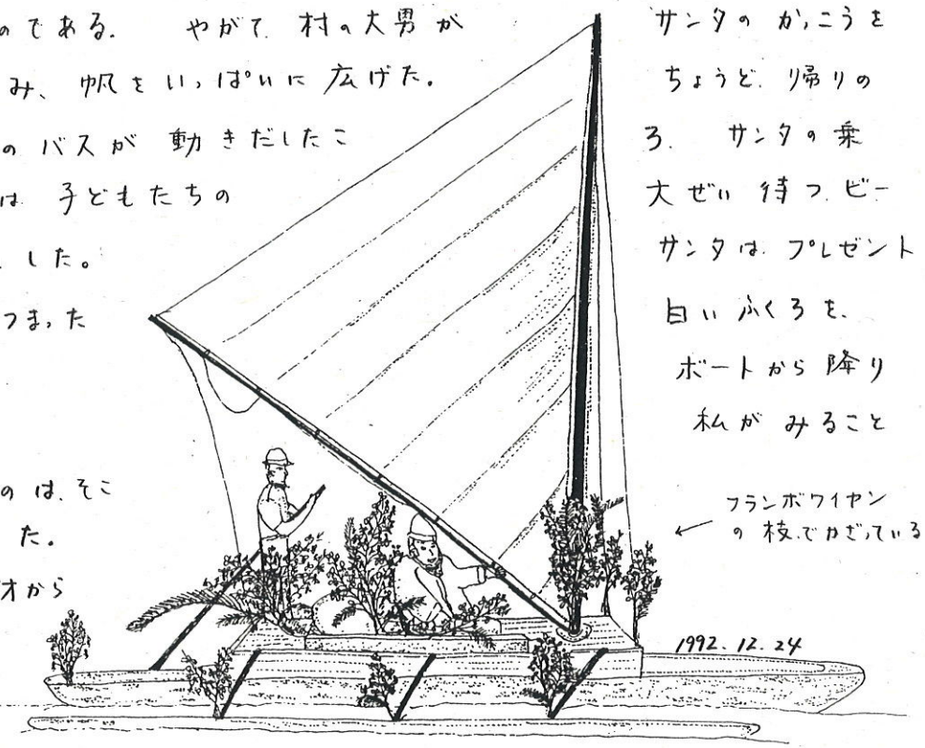


しかし、税関では、バックをあけさえしないで、フリーパス。もってくりゃ、よかったよ。

イル・デ・パンの住人は、メラネシア人がほとんどである。ビーチには、食堂が1つしかないので、そこで食べるしかないが、そこの女主人も、人なつっこそうな、メラネシア人という感じだった。ところが、彼女のお父さんは日本人で、いってみれば日系2世なのである。　日本語は話せないが、日本びいきで、昼食には、さしみを作ってだしてくれたほどである。　さらに、食事の最期に、カレーライスがでてきた時には、びっくり、ぎょう天であった。しかし、みかけはカレーであったが、味はカレーでなかったのが残念だった。　日本人たちは喜んで、みんな、大盛りによそったが、少し食べると、「あれっ」という感じで、あまり残すのもわるいので、半分くらいまで必死で食べていた。

午後3時をまわったころ、ビーチでは、地元の人達が大さわぎをしていた。　まっ赤なフランボワイヤンを枝ごと切ってきて、ボートを飾っているのである。　やがて、村の大男がサンタのかっこうをして乗りこみ、帆をいっぱいに広げた。

飛行機へのバスが動きだしたころ、ちょうど、帰りのボートは、子どもたちの大ぜい待つビーチに到着した。　サンタは、プレゼントのいっぱいつまった白いふくろを、肩にかけてボートから降りてきた。　私がみることができたのは、そこまでであった。　バスのラジオから流れるクリスマス音楽をききながら、



再び、10人乗り小型飛行機にゆられ、イル・デ・パン島を後にしたのである。